

の「近世房総史ノート」は、まもなく五〇〇回を迎える（月二回連載）。そのバイタリテ

ィーに脱帽。その刊行が切望される。

（二〇〇八年七月刊、A5判、三四頁、編集・発行人 日本村落自治史料調査研究所

所長 川村優、〒299-4213 千葉県長生郡八斗

一六一一、TEL〇四七五—三三—五五八二）

（井上隆男）

有園正一郎著

『近世庶民の日常食』

百姓は米を食べられなかつたか』

著者紹介によると「正月を挟んで二ヶ月ほ

ど三食ともサツマイモを食べている。サツマ

イモは一日に五〇〇〜六〇〇グラムほど。副

食は豆腐入りの味噌汁・焼き魚・納豆などで、

栄養のバランスは十分とれている。一〇年近

く続けているが、食べ飽きたと思つたことは

ない。夕食にはグラス二杯ほどのイモ焼酎に

チーズが加わる。」とある。先生が数反部の

田んぼを精魂込めて耕されていることはご相

伴に預っているもので知っていたが、食生活ま

で徹底したものであつたとはついぞ知らなかつ

た。その先生の近著が『近世庶民の日常

食』である。

前近代の諸研究の中で、庶民の日常生活に

ついてはまだまだわからないことが多い。と

くに、庶民の衣食住に対する領主の統制論に

ついては数多の研究書があるも、それでは毎

日どんなものを食べていたかとなると、これ

には確かな答えがないのが現実である。本書

はそうしたことの一つの手がかりとしての滋

賀県民、伊賀国庶民、山形県民、秋田県民、

九州大村藩領民、沖縄島翁長村民などの食生

活の事例を提示したものである。その結果、

近世に生きた我々の先祖たちは、住む土地で

獲れる食材群（サツマイモ・ナス・ダイコン

など）をうまく組み合わせる「地産地

消」の賢い暮らしをしていたことをかかげ、

あわせて近世の史資料からごく普通の人々の

日常食を考証し、各地域の持つ固有の性格を

明らかにしている。

以下に主要目次を掲げる。

はしがき

第一章 庶民の日常食研究の資料

第二章 近世後半の百姓の日常食

第三章 近代初期の滋賀県民の日常食

第四章 近代初期の伊賀国庶民の日常食

第五章 近代の山形県と秋田県庶民の日常

食

第六章 近世後半以降の信濃国庶民の日常

食

第七章 西南日本三地域のサツマイモ食普

及と人口増加

第八章 九州大村藩領の村人の日常食

第九章 沖縄島翁長村の一九世紀後半の土

地利用と日常食

第一〇章 ナスとダイコンの故郷

第十一章 肥料がとりもつ都市と近郊農村

との縁

話の小箱

本書は大学三年生から大学院修士課程の地

理学の学生を対象にする講義用テキストとし

てまとめられたものであるが、評者は昨年度

から家政学部の食物史コースの学生さんと読

む機会を得て、データーを関東農村に置き換

えて紹介し始めているが、これまでの食物史

の学生にはこうした視点がほとんどないので

比較的興味を覚えて受け入れてくれているこ

とからも、これらの著作が学部間を越えて展

開するときの著作ともなることは確実である

う。

このあたりの視点は、はしがきに「この本には、主に一九世紀から一九二〇年代までを生きた庶民（ごく普通の人々）の日常食をとおして見た地域性が記述してあります。一九世紀から一九二〇年代は近世後半から近代にあたる時代ですが、私が資料を集めた地域では、庶民の日常食の内容はこの期間に変わらなかったもので、この本が語る時代を「近世」としました。次に、副題の「百姓は米を食べられなかったか」は、私が近世から近代を生きた庶民の日常食を明らかにしようと思いついた頃の、私自身のへの問いかけです。この本の読者の中にも同じ疑問を持つ方がおられるのではないのでしょうか。その答えは第二章に書いてありますが、近世のお百姓たちは結構米を食べていたことがわかりました。」とある一文に凝縮されているであろう。

（二〇〇七年四月刊、A5判、二一九頁、一八〇〇円＋税、海青社）

（西海賢二）